

ガラス造形作家、西中千人 「既成概念を叩き壊して前進する。 それが僕の哲学」

西洋で発展したガラスという素材を使って、日本の美を追求し続ける気鋭の作家、西中千人。彼が考える、西洋と日本、アートと鑑賞者の関係性とは？

色

付きのメガネに革のジャケット、長い脚がはつきりとわかるホワイトジーンズ、そして筋肉隆々の鍛え抜かれた上半身……西中千人は、いわゆる日本における「芸術家」と呼ばれる多くの人々のイメージとは遠くかけ離れた、まるでスポーツ選手と見紛うような長身のガラス造形作家である。

「ガラス種の付いた吹き竿を長時間自分の思い通りに操るには、やっぱり身体がしっかりしていないとダメなんです。特に大きな作品の場合は、体力がないと創れません」（西中さん、以下同）

異色なのは、その姿勢好だけではない。経歴も変わっている。子どもの頃はアートの全く興味がなかった。高校時代、父親が大病したことを契機に医療系の道へ進もうと決意。星薬科大学薬学部を卒業して薬剤師の免許も取ったという。

「でも僕は元々注射が嫌いで、病院も嫌い。医療系の仕事は向いてないと悟った。さてどうするかと悩んでいた時に、たまたまガラス工房を見学したんです。坩堝の中でオレンジ色に溶けているガラスにものすごい衝撃を受けて、俺もやってみてえーって、思っちゃった」

勢いそのままにガラスメーカーのカガミクリスタルに就職し、その面白さに開眼。そしてさらに上を目指して、当時ガ



《呼吸「悠久」》2019年
ガラス、金箔、銀箔 高38cm

ラスアートの分野で定評のあったカリフォルニア芸術大学に留学する。

「でも、一所懸命に研鑽して技術的には誰にも負けないようになって、周りの目は冷やかかされた。つまり当時の僕のガラスは、西洋で発展したもののモノマネでしかなかった。そこで気がついたのは、自分は日本人だということ。日本人ならではのガラスアートを創り、それを世界中に分かるかたちで伝えることが自分の使命だと思いました」

西中の異能ぶりは、以後、当然のごとく創作の世界でも発揮された。そのひとつの試みが室町・桃山時代から続くといわれる金継ぎをはじめとした「呼吸」だった。割れてしまったつわを別の材であえて強調して継ぐことで、新たな生命を吹き込む——陶芸の世界におけるこの方法を

「枯山水の庭園は、砂利や石などで禅の宇宙観を表した空間です。僕はそこにさらにリサイクルガラスと光を取り入れ、生命の循環を象徴的に表現することで、日本人の美意識の歴史的な繋がりを目指しました。でも、そんな理屈は抜きに、鑑賞者がここに身を置いて、自由に何かを感じ取ってもらえればいい。音楽やファッションを楽しむように、実は僕の作品の前では、皆さん一人一人の心が、主役なんです」

数百年の後も、彼の創造した美意識が日本人の美意識として普遍性を持ち続けていることを、大いに期待したい。



法然院参道に恒久設置された《ガラス枯山水「つながる」》。ガラスのオブジェ（最大高約180cm）は、ガラスびん会社と共同研究し、リサイクルガラスを使って制作したもの。それらを長さ40mにわたる空間に、西中独自の視線で磨石のように配置した。「循環する命と繋がっていく宇宙」を表現しているという。2019年5月設置。



西中千人 にしなか ゆきと



1964年、和歌山県和歌山市生まれ。88年、星薬科大学薬学部卒。89～90年、ガラスメーカーのカガミクリスタル勤務。91～94年、カリフォルニア芸術大学に留学。帰国後、ガラス造形作家として活動をスタート。2001年より毎年、国内で個展を開催するとともに、ロンドン、ニューヨーク、香港など海外のいくつものアートフェアに出展し、高い評価を得る。現在、千葉県茂原市に工房を構え、創作を続けている。

芸術新潮



5 特集
おしゃべり魂の軌跡
ニッポンの
錦木 振樹の
着流し 艶姿

【表紙付録】
特別展「もののKIMONO」
コッポラ海軍
山崎 零
「おせよキモノ乙女」